

「思う」認識動詞構文について¹

—補文述語制約の観点からの一考察—

陸 丹

キーワード：状態性、恒常性、信念世界、事態の対比、個体の対比

1. はじめに

日本語においては、以下のようないわゆる認識動詞構文と呼ばれる構文が存在する。

- (1) a. 私はあいつを天才だと思っている。
- b. 彼は新型ミニ・クーパーをかわいいと思っている。

(1)の各文は、それぞれ「あいつ／新型ミニ・クーパー」に対して、「天才／かわいい」という属性を認めていると解釈されており、「あいつは天才だ／新型ミニ・クーパーはかわいい」という意味をも表している。しかしながら、このような意味を持ちながらも、「あいつ／新型ミニ・クーパー」という名詞句はヲ格でマークされている。つまり、表面上では、これらの名詞句はヲ格でマークされているが、実際の意味解釈ではト節補文内の述語と関係を持っていると考えられる。更に、この構文に対して言える特徴として、補文述語が常に名詞、形容詞、または状態性が高い動詞に限られるという制約があることである。本稿では、この補文制約という観点から、認識動詞構文に関する考察を行う。

2. 先行研究と問題の所在

認識動詞構文のト節補文には、無条件に述語が出現できるわけではないことが指摘されている。認識動詞構文の補文に最も出現しやすい述語は名詞、形容詞であると考えられている (cf. 坪本(2001)、高橋(2003)、阿部(2002、2004)、Harada (2005))。

- (2) a. 村の民は君を神様だと思っている(らしい)よ。
- b. 天才の君もこのテーマを難しいと思っているのかい？
- (3) a. *私は山田さんを電車で来ると思った。 (坪本(2001:438))

¹ 本稿の執筆に際して、北原賢一氏、小栗哲哉氏より有益なコメントを頂いた。ここに記して、謝意を表したい。

- b. *お父さんはお兄さんを(自分の車を)運転したと思っている。

(2)に見られるように、補文述語が名詞、または形容詞の場合、認識動詞構文は容認される。このことから、益岡(1987)の「認識主体が対象に対して何らかの属性を認める、という内容の事象を表す構文である」という認識動詞構文の定義が成り立つと考えられる²。

しかし、全ての動詞が認識動詞構文の補文に現れないわけではない。Harada (2005)は補文述語が動詞の場合は、Vendler (1967)の4分類に基づいて、補文述語が動詞でない場合は、non-verbal (adjectival) predicate、と adjectival predicate に分け、以下のように認識動詞構文が可能かどうかを観察している。

- (4) a. *山田はジョンを休日に学校へ行ったと思っていた。(activity verb)
b. *学生はみんなもう試験期間を{終わった/終る}と思っていた。
(accomplishment verb)
c. ?*山田はジョンを{結婚した/結婚する}と思っていた。
(achievement verb)
d. ?*山田はジョンを{疲れた/疲れる}と思っていた。(stative verb)
e. マリコはその曲を美しいと思っていた。(non-verbal (adjectival) predicate)
f. 太郎は次郎を馬鹿だと思った。(adjectival predicate)
(Harada (2005:10))

Harada (2005)は、(4)以外に(5)のようなものも提示している³。

- (5) a. マリコはジョンを太っていると思っていた。
b. 山田はジョンを疲れていると思っていた。
(Harada (2005:11))

Harada (2005)以外にも、坪本(2001)の補文述語に関する考察がある。坪本(2001)は以下のような例を提示し、補文述語と「恒常性」の関係について言及している。

² 更に、益岡(1987:147)はこの補文を「属性叙述補足語」と呼んでいる。

³ Harada (2005)は、(4)と(5)の例を挙げた上で、以下のような一般化を提示している。

(i) A Characteristics of Raising-to-Object in Japanese:

Individual-level predicates are highly preferred embedded predicates in RTO.

(Harada (2005:11))

- (6) a. (?) 僕は山田さん(のこ)を毎日よくがんばっていると思っていた。
 b. (?) 私は田中君(のこ)をよく子供の面倒を見ていると思っていた。
 c. (?) 僕は今まで太郎(のこ)を車を運転すると思っていた。

(坪本(2001:439))

(6)のような場合、「動作動詞+テイル」という形を取っているが、「毎日、よく、今まで」などの副詞成分と共起することによって、補文が習慣的な意味を表している。坪本(2001)は冒頭の(3)の例とこの(6)を比較し、前者のほうはいわゆる「場面レベル(stage-level)」⁴のものであり、後者はいわゆる「個体レベル(individual-level)」のものであると述べ、補文の事態が(3)のように個別性が高いものより、(6)のような恒常的な(あるいは一般的、習慣的な)特徴づけのほうがよりふさわしいという考察を提示し、認識動詞構文の意味機能を「「NPを」について叙述する(判断、評価)(坪本(2001:438))」と主張している。

ここで、補文述語が動詞である場合に関する Harada (2005)と坪本(2001)の指摘を整理してみよう。Harada (2005)が提示している言語事実から考えてみると、((4a-d)の動作性の高い述語より、(5)の状態性が高い述語のほうが相応しいという制約が考えられる。更に、坪本(2001)の考察によると、個別性が高いものより恒常性が高いもののほうがより相応しいという制約があると考えられる。このことから、「状態的-動作的」と「恒常的-個別的」という二つの対立関係があると考えられる。この二つの対立する関係を考えると、「状態的」であれば、必ずしも「恒常的」であるとは考えられない。例えば、Harada (2005)の「山田はジョンを疲れていると思っていた」という例の場合、「疲れている」は「状態的」だが、「恒常的」ではないことはいままでもない。つまり、「状態的」である場合、「ジョンが疲れている」のように「個別的」になる場合もあるし、「山登りは疲れる」のように「恒常的」になる場合もあると考えられる。そして、「動作的」の場合も、「よく頑張っている」のように「恒常的」になる場合⁵もあれば、「今研究室で頑張っている」のように「個別的」になる場合もある。この二つの対立関係については更に検討する必要があるが、本稿では、従来指摘されている認識動詞構文の補文制約に関する記述に注目したい。すなわち、もっとも認識動詞構文の補文にふさわしくないとされているものは「動作的、個別的」なものであるという点である。

以下では、「動作的(状態性が低い)かつ、個別的な(恒常性が低い)」ものが認識動詞構文の補文述語に出現できないという指摘の検討を行い、それに反する言語事実を指摘し、そ

⁴ 「場面レベル(stage-level)」とは時間の断片における状態を表すものであり、「個体レベル(individual-level)」とはある個体の属性を表すものである。詳しくは Carlson (1977)を参照。

⁵ 当然習慣であれば、ある種の状態であることも考えられるが、これについては更なる検討が必要だと考えられるため、今後の課題としたい。

の特徴を考察する。

3. 動作的、個別的なものは認識動詞構文の補文に生起できないのか

3.1 「動作的、個別性」と「事態の対立」

前節では、認識動詞構文の補文制約に関する先行研究を概観し、「動作性が高い、かつ個別性が高い」ものが述語に出現する場合、容認されないと観察されていることを見てきた。

- (7) a. 山田は太郎をよく来ると思っている。
b. ??/*おじいちゃんは太郎を来たと思っている。
- (8) a. 花子は息子を太っていると思っている。
b. ??花子は息子を太ったと思っている。

上の(7a)の「よく来る」は習慣読みであるため、恒常性が高く、(7b)の「来た」は一時的な出来事であるため、恒常性が低いと考えられる。そして、(8a)の「太っている」は状態性が高いと考えられるのに対し、(8b)の「太った」は変化を表すという意味で、動作的とまではいれないが、状態性が比較的低いと考えられる。これらは先行研究の指摘に従った振る舞いを見せ、それぞれの「状态的、恒常的」な a 文のほうが自然である。しかしながら、上のそれぞれの b 文は以下のようにある文脈を提示すると、容認度が上がる。

- (9) {太郎はまだ家にいるのに／太郎はまだ来ていないのに}、山田は太郎を来たと思っている。
- (10) {息子の太郎はむしろ体重が5キロも減ったのに／息子の太郎はまったく変わっていないのに}、花子は太郎を太ったと思っている。

上の文は、現実の事態に対し、「山田／花子」がまったく異なる事態を認識していることを表している。ここで、注目したいのは、(7b)、(8b)のような「動作的、個別的」な補文述語を有する認識動詞構文でも、((9)、(10)のように)補文が表す事態と異なった事態が存在するような反事実文脈を提示すれば、容認度が上がることである⁶。この容認度の差を詳しく検討するまえに、「反事実」に関して考えてみたい。

「反事実」とは、何らかの可能世界で捉えた事態が、現実世界で実際に起きた事態と食い違っていることである。ここで言う「可能世界」というのは、認識動詞の主語である(上

⁶ (7b)、(8b)を容認し、かつ反事実という解釈を読み込まない母語話者もいる。つまり、容認度のゆれが存在すると考えられ、これに関する考察は今後の課題としたいが、ここで注目したいのは、(7b)、(8b)を容認しない母語話者でも、反事実の文脈の提示することによって、「動作的、個別的」な補文を持つ認識動詞構文に対する容認度が上がることである。

の例でいえば「山田／花子」といった認識主体が作った信念世界のことである。このようないわゆる「世界」は我々が認知能力を用い、いくらでも作ることが可能であると考えられている。Fauconnier (1994)は、このような「世界」をスペースと呼び、スペースは言語表現を用いて導入することが可能であり、その言語表現の中には英語の *believe*、*hope*、*claim* などの引用節を伴った動詞があると論じている⁷。このことから、本稿で扱う「思う」という動詞も同様なスペース導入機能があると考えられる⁸。そして、発話における現実世界も発話時点に導入されているため、当然「思う」によって導入される認識主体の信念世界との対比が可能となる。このことについては、4 節で詳しく見ることにし、ここでは、事態の対比の種類を考えてみたい。「現実世界－(「思う」の認識主体の)信念世界」の対比以外に、「信念世界－信念世界」といった対比も存在しうると考えられる。この場合、認識主体が二人いることが前提となる。これを(7b)、(8b)に適用してみると、以下のようになる。

(11) {あなたは太郎が来るわけがないと思っていると思うけど／あなたが何を言おうと)、私は太郎を来たと思っている！

(12) {あなたは太郎が太ったわけがないと思っていると思うけど／あなたが何を言おうと)、私は太郎を太ったと思っている！

(11)、(12)は「あなた」と「私」という認識主体の持つ二つの信念世界の対比を表している文である。ここでも、問題の(7b)、(8b)と比べ、容認度は上がっている。更に、「信念世界－信念世界」という対立は、同一時点における異なる認識主体による二つの信念世界の対比だけではなく、同一の認識主体による時間軸上の異なった時点における信念世界の対比も可能だと考えられる。(7b)、(8b)に適用すると、以下のようになる。

(13) 当初私は太郎を来ると思っていたけど、今はそう思っていない。

(14) 最初私は太郎を疲れたと思っていたけど、今はそう思っていない。

(13)、(14)は「私」という認識主体の二つの信念世界が対比されている場合である。「当

⁷ それ以外にも、時間表現(“in 1929”)、空間表現(“at the factory”)、副詞(“really”)などもスペースの導入が可能だとされている。更に、語用論的に、スペースの設定も可能だとされている。認識動詞構文にかかわる時間表現によるスペースの導入は(13)、(14)に見られる。

⁸ 発話時点に、二つの「世界」が存在するという考え方に似た見解は砂川(1987)にも見られる。砂川(1987)は、「命題＋モダリティ」という言語標識及び、それに関連する要素(発言の主体、発話の聞き手、発話の時点、発話の行為など)が二重に存在することができると論じている。このことから、砂川(1987)は「場の二重性」という用語を用いている。

初／最初」という過去における信念世界と「今」という現在の信念世界が設定されている。これらもまた(7b)と(8b)より容認されると考えられる。

以上のことから、「現実世界－信念世界」、「認識主体 A の信念世界－認識主体 B の信念世界」、「ある時点の信念世界－別の時点の信念世界」の対立が、「動作的、個別的」な補文述語を有する認識動詞構文の補文成立に関与していると思われる。ここで、このような「世界」の対立は、更に具体的に言えば、引用節内に現れている「事態」の対立になろう。したがって、本稿では「事態の対立」と呼んで以下議論することにする。

次節では、2 節で指摘した「動作的、個別的」な補文述語を有する認識動詞構文と「事態の対立」の関係を検討する。

3.2 「事態の対立」と認識動詞構文の関わり

先行研究によると、認識動詞構文の補文述語が「動作的、個別的」である場合、成立しないと指摘されている。

- (15) a. *先生は太郎を(明日の運動会で)走っている。
- b. *太郎は演奏会を(もう)終わったと思っている。
- c. *太郎は佐藤さんを(今朝)何か新製品を開発したと思っている。
- d. *先生は太郎を(今回のマラソン大会で 50 キロ)走りきれたと思っている。

(15)は全て一回的な出来事を表している。先行研究の観察と同様に、いずれも容認されない。ここで、事態の対比文脈を加えてみると、以下のような事実が観察される。

[現実世界－信念世界]

- (16) a. 太郎は怪我で、明日の運動会を休むのに、先生は太郎を(明日の運動会で)走っている(らしい)。
- b. 演奏会は始まったばかりなのに、太郎は演奏会を(もう)終わったと思っている(らしい)。

[認識主体 A の信念世界－認識主体 B の信念世界]

- (17) a. あなたは佐藤さんが新製品を開発したわけがないと思っていると思うけど、私は佐藤さんを新製品を開発したと思っている！
- b. あなたは太郎がちゃんと 50 キロ走りきれたわけがないと思っていると思うけど、私は彼をちゃんと走りきれたと思っている！

[ある時点の信念世界－別の時点の信念世界]

- (18) a. 最初私は太郎を(明日の運動会で)走っていたが、今はそう思って

いない。

- b. 最初私は戦争を(もう)終わったと思っていたが、今はそう思っていない。
- c. 最初私は佐藤さんを何か新製品を開発したと思っていたが、今はそう思っていない。
- d. 最初私は太郎をちゃんと 50 キロ走りきれたと思っていたが、今はそう思っていない。

(16)・(18)から確認できるように、「動作的、個別的」である補文も事態の対比文脈の付加によって、容認されるようになる。以上のことから、(19)が導き出される。

- (19) 認識動詞構文の補文述語に「状態性が低い(動作的)、恒常性が低い(個別的)」ものが現れる際、補文が表している事態の対比文脈を与えれば、構文が成立しやすくなる。

4. 事態の対比

前節で確認したように、認識動詞構文の補文述語に「状態性が低い、恒常性が低い」ものが出現する場合、事態の対比文脈を想定すると容認度が上がる。ここでは、この対比文脈について考えてみたい。

認識動詞構文における反事実解釈は阿部(2002、2004)も指摘している。阿部(2002、2004)は認識動詞構文のヲ格名詞句は統語の面において、特殊な位置にあるため、その解釈も特殊であると分析している。阿部(2002、2004)が提案した認識動詞構文の構造とそれに対応する用例を以下のように示す。

- (20) a. 太郎は花子を学生だと思っているらしい。
b. Xが [sc Aヲ [pro Bダト]] V

(20b)の「SC」とはSmall Clause(小節)ということを表している。小節とはテンスを含まないが、中の要素が主語と述語の関係を持っている節であるとされている⁹。そこで、阿部(2002、2004)はこの小節が透明となっているため、「Aヲ」(つまり、「花子を」)のヲ格が外の主文動詞「V」(つまり「思っている」)から付与されると分析している。更に、この構造上の「透明性」は意味上も「指示の透明性」として反映しているとし、その証拠として、以下のような例を示している。

⁹ しかし、3 節の考察からもわかるように、引用節内にはタ形が現れてくる場合((16)・(18)の例)も可能であり、小節の性質と矛盾しているようにも考えられる。この点に関して、阿部(2002、2004)は確かにテンスの存在を認めているが、その位置は直接小節内にあるのではなく、小節内のト節の中にあり、テンスと小節の間にはト節が介在すると考え、別に問題をなしていないとしている。

- (21) a. 太郎はその時 UFO でないものを UFO だと思った。
 b. #太郎はその時 UFO でないものが UFO だと思った。

(21a)は、太郎が実際に「UFO」ではないものを見間違え、それが UFO だと判断あるいは認識したという意味になっている。しかし、(普通の引用節、つまり透明な節を有しない)(21b)はこのような意味を表すことは不可能である。この現象から阿部(2002、2004)は a 文の認識動詞構文は反事実的表現が可能であるとし、その原因をヲ格の透明性に還元し、更に認識動詞構文は b のような引用節を伴った構文とは直接関係がないと論じている。ここでいう「指示の透明性」とは、Fauconnier (1994、1997)のいう「名詞句の透明な解釈」に相当すると考えられる。以下では、これについて見てみよう。

- (22) a. #花子は花子でない。
 b. #太郎は花子が花子でないと思っている。
 c. 太郎は花子を花子でないと思っている。

(22a)と(22b)は不自然と感じられる¹⁰が、その不自然さは文法的な要因ではなく、解釈上の矛盾によるものである。矛盾と解釈されるのは「花子」という値を持つ個体に対して、「花子でない」のようにその値を否定しようとするからであると考えられる。これをメンタル・スペース理論で考えると、以下のように説明される。すなわち、「単一スペースでは、be によって表現される同一性の関係が二つの相異なる要素によって満たされることはありえない。もし a と b が異なる時に、“ $d_a be d_b$ ” が与えられるなら、唯一の解釈は換喩的解釈である。すなわち、役割・値の割り当てや語用論的結合などである(フォコニエ(1996:197-198、Fauconnier (1994)の翻訳版による引用))」と考えられている。そして、日本語の「A は B である」のような「～である」は英語の「be」に相当している。すると、(22a)と(22b)の矛盾した解釈は、「単一スペースで、相異なる要素を結び付けようとする、または同定しようとする」からであると考えられる。このような「単一スペースで、二つの値を結び付ける、または同定する」ことを、(22a)を例にして図で表すと、以下のようになる。

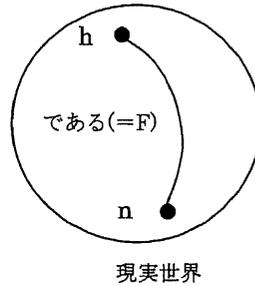
¹⁰ (22b)を(22c)とまったく同じように解釈する母語話者もいるようである。

(23) a. #花子は花子でない。(矛盾と解釈される場合)

b.

h : 花子

n : (花子でない人物、
例えば) なおみ



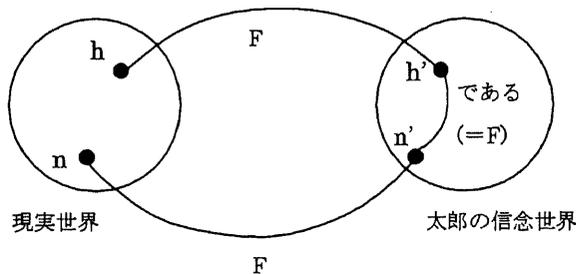
この場合、「花子でない」ということは、異なった個体のことを指すことになり、(23b)では花子とは異なった個体、つまり「花子でない人物—なおみ(n)」を用いて、表現することにした。この場合では、何もスペースが導入されていないため、想定されるスペースは現実世界のスペースのみである。そして、「花子(h)」と「花子でない人物(なおみ、n)」が現実世界において、同一性の関係を示す「～である」によって結び付けられ、同定されている¹¹。この同定化により、「花子」という値は「なおみ」という値に相当する」という矛盾した解釈が生じる。このことは(22b)に対しても当てはまると考えられる。ただし、(22a)と異なっているのは、「太郎の信念世界」という新しいスペースが「思っている」という表現によって作られ、導入されている点である。図で表すと、以下ようになる。

(24) a. #太郎は花子が花子でないと思っている。(矛盾と解釈される場合)

b.

h : 花子

n : (花子でない人物)
なおみ



h' : 花子

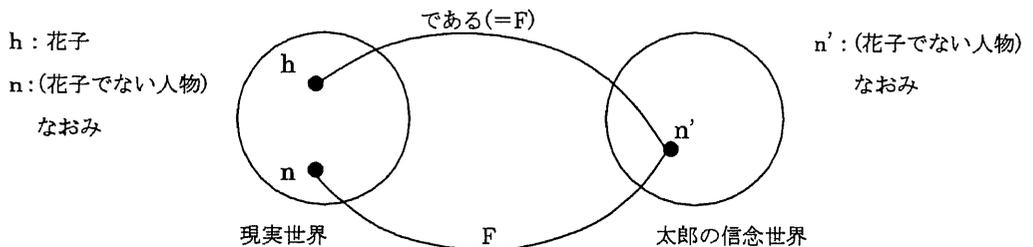
n' : (花子でない人物)
なおみ

¹¹ (23b)では、「である(=F)」と表示しているが、「F」とは、要素を結び付け、同定するいわゆる関数のことである。「である」のような「同一関係を示す」言語表現によって生じる関数もあれば、特定の言語表現によって生じるものでなく、語用論的理由によって生じるものもあり、それは語用論的関数と呼ばれている。

(24b)では、太郎の信念世界が想定されているため、現実世界のスペースを合わせると、スペースが二つ存在する。そして、「花子(h')」と「花子でない人物(なおり、n')」は太郎の信念世界に存在する。更に、「花子」と「花子でない人物(なおり)」は太郎の想像人物でなければ、現実世界にも存在するため、現実世界のスペースにもそれぞれの対応物 h、n が存在する。この「h と h'」、「n と n'」は語用論的関数 F によって結ばれ、同定されている。この場合でも、太郎の信念世界というスペース内で、「花子(h')」と「花子でない人物(なおり、n')」という要素が同一性の関係を表す「～である」によって結び付けられ、同定されている。従って、(23)と同様に、「同じ花子なのに、花子は花子でない」のような矛盾した解釈が生じている。

ここで、注目されたいのは、「太郎は花子を花子でないと思っている」の(22c)の解釈である。(22c)は(22a)、(22b)とは異なり、矛盾した解釈を持っていないことから、上述の (23)、(24)のような「単一スペース内で異なった要素を同定する」という同定化が存在しないと考えられよう。Fauconnier (1994、1997)は(23)、(24)のような「単一スペース内の要素を同定する」という同定の方法以外に、「他のスペースにあるその要素の対応物によって、同定する」というもう一つの方法があると指摘している。これに従うと、(23c)は以下のようになる。

- (25) a. 太郎は花子を花子でないと思っている。
b.



(25)は(24)と同様に、「思っている」という表現によって、太郎の信念世界というスペースが導入されており、更に、「花子でない人物(なおり、n')」も太郎の信念世界のスペースに存在する。この場合も、特に太郎の想像上の人物でない場合、現実世界のスペースにその対応物 n が存在し、両者は語用論的関数 F によって、関係づけられて同定されている¹²。ここで、(24)と異なっているのは、「花子でない人物(なおり、n')」の同定化の方法である。

¹² この場合も、太郎が「花子」という人物の存在を知っていれば、太郎の信念世界に「花子(h')」が存在すると考えられ、更に、語用論的関数 F によって、現実世界の h と同定されるが、ここではわかりやすさのため、示さないことにした。

つまり、(24)の場合は、同じ信念世界に存在する「花子(h')」によって同定されており、(25)の場合は現実世界に存在する「花子(h)」によって、同定されている。言い換えれば、(24)の場合は n' の対応物 h' が同一スペース内に存在し、(25)の場合は n' の対応物 h が異なったスペースに存在することになる。従って、(25b)の解釈も(23)、(24)とは異なり、「太郎は現実世界における花子に対し、(彼の信念世界においては)それが花子ではないという判断を下した」となる。(23)、(24)のような「単一スペース内での同定」(つまり、直接同定)と(25)のような「スペース間での同定」(つまり、間接同定)に関して、Fauconnier (1994)では、以下のように述べられている(引用は Fauconnier (1994)の翻訳版(フォコニエ(1996))によるものである)。

- (26) 多くの場合、直接同定は名詞句の狭いスコープの不透明な解釈に対応し、間接同定は広いスコープの透明な解釈に対応する。

(フォコニエ(1996:242))

(26)の指摘に従えば、(23)、(24)の場合は「名詞句の不透明な解釈」になり¹³、(25)(つまり、認識動詞構文)の場合は「名詞句の透明な解釈」になる。従って、阿部(2002、2004)での「太郎は UFO でないものを UFO だと思っている」のようないわゆる透明性の場合もこのメンタル・スペースで考えると、「同定がスペース間で行われている」ことになる。しかし、本稿で指摘した3節のような認識動詞構文は「UFO」や「花子」のような例とは多少異なると思われる。

- (27) 太郎は花子を花子でないと思っている。 ((23c)の再掲)

- (28) a. {太郎はまだ家にいるのに／太郎はまだ来ていないのに}、山田は太郎を来たと思っている。

- b. {息子の太郎はむしろ体重が5キロも減ったのに／息子の太郎はまったく変わっていないのに}、花子は太郎を太ったと思っている。

((10)の再掲)

(27)の場合では、「花子」と「花子でない人物」による対比は(現実と信念の)世界を超え、二つの個体が同定化されることによって、生じたものであると考えられる。それでは、(28)はどうであろう。(28)の場合は、「太郎」と「太郎でない人物」による対比ではなく、「現実世界における事態」と「信念世界における事態」による対比となっている。しかし、「異なったスペースにおいて異なった事態にかかわる同一の個体は異なった個体とみなせ

¹³ しかし、すべての「不透明な解釈」が(23)、(24)のように、矛盾と解釈されるわけではない。例えば、値と役割の関係の場合、不透明な解釈は矛盾せず解釈される。

る」ということも考えられるため、「現実世界において事態 A にかかわる太郎」と「信念世界において事態 B にかかわる太郎」との対比も考えられよう。実際にも(29)を以下のよう書き換えることが可能である。

- (29) a. 彼は今まだ家にいる太郎をもうここに来たと思っている。
b. 花子は体重が5キロも減った太郎を太ったと思っている。

(29)は現実世界では「今まだ家にいる／体重が5キロも減った」太郎が認識主体の信念世界では「ここに来た／太った」太郎によって同定される(つまり、「異なった事態にかかわる二つの個体」が同定される)と考えられる。すると、本稿で言う「事態の対比」は「個体の対比」と同様に、「異なったスペースにおける二つの個体が同定される」ことによって、生じた解釈であり、「個体の対比」の一種であるとも言えよう。

5. まとめ

本稿では従来の認識動詞構文の補文述語に対する考察の妥当性を検討した。その結果、従来指摘されている制約に反し、「状態性が低い、かつ恒常性が低い」補文述語が現れる場合、対比する文脈があると、認識動詞構文が成立することを示した。対比文脈とは「現実世界－信念世界」、「認識主体 A の信念世界－認識主体 B の信念世界」、「ある時点の信念世界－別の時点の信念世界」という対比関係を示す三つの文脈であり、認識動詞構文のこういった対比文脈において生じる「対比」はメンタル・スペース理論の「異なるスペースの相異なる要素を同定する」という原則によって、説明することが可能であることを示した。

しかし、「状態性が低い、かつ恒常性が低い」補文述語の場合に、対比文脈が提示されなければならないのはなぜなのか。同じ認識動詞構文でありながら、「状態性が高い、かつ恒常性が高い」補文述語の場合には対比文脈が必要とされないのはなぜなのか。更に、対比文脈に依存せず、「状態性が低い、かつ恒常性が低い」補文述語が出現した認識動詞構文を許す母語話者についてどう処理すればよいかなどは今後の課題としたい。

【参考文献】

- 阿部 二郎(2002)「認識動詞構文について」『日本語文法』2-1, pp.89-108.
阿部 二郎(2004)『現代日本語における引用句の諸相：引用句内の構造を中心に』筑波大学博士論文。
渋谷 勝己(2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1-3, pp.32-45.
砂川 有里子(1987)「引用文の構造と機能－引用文の3つの類型について－」『文藝言語研究言語篇』13, 筑波大学, pp.73-91.
高橋 圭介(2003)「引用節を伴う「思う」と「考える」の意味」PDF版。
(<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/4/4-07.pdf>)

- 坪本 篤朗(2001)「認識動詞構文の形式と意味－文法と認知の接点－」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編 『意味と形のインターフェイス 上巻』くろしお出版, pp.435-449.
- 藤田 保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.
- 益岡 隆志 (1987)『命題の文法』くろしお出版.
- 三尾 砂(1948=2003)『国語法文章論』三省堂。(『三尾砂著作集』に再録)
- 三原 健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
- Fauconnier, Gilles (1994) *Mental Spaces: aspects of meaning construction in natural language*, MIT Press. (坂原茂、水光雅則、田窪行則、三藤博(訳)(1996)『メンタル・スペース：自然言語理解の認知インターフェイス』白水社)
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press. (坂原茂、田窪行則、三藤博(訳)(2000)『思考と言語におけるマッピング』岩波書店)
- Harada, Naomi (2005) "Raising-to-Object: From a Different Plane," PDF 版.
(<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/langlogic/PAPERS/HaradaHandout.pdf>)
- Kaneko, Yoshiaki (1988) "On Exceptional Case-marking in Japanese," *English Linguistics* 5, English Linguistic Society of Japan, pp.271-289.
- Kiparsky, Paul and Kiparsky, Carol (1970) "Fact," *Progress of Linguistics*, Mouton, pp.143-174.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of Japanese Language*, MIT Press.
- Kuroda, Shige-Yuki (1979) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Garland.
- Kikuchi, Akira and Takahashi, Daiko (1991) "Agreement and Small Clauses," *Topics in Small Clauses: Proceedings of Tokyo Small Clause Festival*, Kurosio Publisher, pp.75-105.
- Ueda, Masanobu (1988) "Exceptional Case-marking in Japanese," *Sophia Linguistica*, 23-24, Sophia University, pp.38-46.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.